

## 修士論文概要

標題：脳卒中発症者の社会参加を支援するプログラムの論理構成と策定プロセス

－上伊那地方のある試みの妥当性の検証－

学籍番号 09MD122 氏名 中村 賢二

### 研究の目的と方法

日本で2000年に始まった介護保険制度では、脳卒中は寝たきりになるリスクの最も高い疾病のひとつと考えられ、発症者は寝たきり予備軍と捉えられた。脳卒中は寝たきりの予防と、発症および再発の予防という医療的「個別支援」に焦点が当てられ、その傾向はより強まる中で現在に至る。社会保障費の増加抑制がその背景にある。

しかし一方で脳卒中は、病後に地域での社会生活の再構築をいかに行うか、という「地域支援」の積極的な対応が行われてきた。老人保健法制度における機能訓練事業の中では身体機能訓練だけでなく、様々な生産活動や利用者同士の交流に加え、地域を越えた全国規模でのつながりが作られていた。加えてこの事業から派生した当事者グループの研究会や活動も多数生まれている。

にもかかわらず、保健事業の機能訓練は介護保険制度が始まるとともに、現在は実質的に終了している地域が多い。これに加え、脳卒中では介護保険制度利用優先の指針を背景に障害者支援制度が十分利用されにくい。介護保険制度開始後のこうした制度の改定が、特に比較的若年である脳卒中発症者の地域支援を困難にしている。

例えば、筆者は長野県上伊那地域で8年間訪問リハビリテーションに携わる中、在宅で生活する30代～50代の脳卒中後遺症者が、地域で居場所を見つけられない例を複数担当している。本人の社会参加の希望や必要性に対し、地域でこうした場を見つけることが難しい。制度の変遷に伴う問題であることを考慮すれば、これは上伊那に限る話ではない。

本研究は、このような現状に対し上伊那医療生活協同組合が計画した、脳卒中発症者の社会参加を支援するプログラムを対象とした。筆者はプログラムの策定に中心的に関わりながらも、第三者的視点から批判的に分析を行った。

研究の目的は、上伊那地域脳卒中発症者の社会参加を支援するために計画されたプログラムの妥当性を検証するとともに、残された課題を明確にし、課題解決の提案を行うことである。

研究の方法は以下である。

まず脳卒中発症者の現状を整理するために、脳卒中支援の医療・保健・介護・障害の各分野の経緯と現状を整理し、直面している社会的制度的な問題の分析を行った。次にこうした全国の傾向と対比させながら、上伊那地域の脳卒中発症者を取り巻く社会・制度面での問題を整理した。加えて、地域の脳卒中発症者のニーズと支援課題の把握を目的に、上伊那で地域生活を送る脳卒中発症者10名に対し個別に質的調査(半構造化インタビュー)を実施した。インタビューでは、入院中から現在に至る経緯の中で、制度や社会環境にどのような問題があるか、どのような場を望むか、また病中・病後の生活体験を地域に、どのように生かしたいかについて調査した。併せてケースごとの課題をまとめ、地域の問題と地域ニーズと関連付け、上伊那地域の脳卒中発症者の社会参加における現状と問題を整理した。

その後上伊那医療生活協同組合が策定したプログラムを提示し、妥当性の検証を行った。インタビュー対象者の社会的背景を年齢・性別・発症後年数・居住地・居住形態や家族背景の5要素に分け、偏りがないか検証した。加えてプログラムと上伊那地域のニーズとの整合性の検証を行

った。上伊那地域内外の参照事例の調査では、インターネットで基本情報や団体の歴史的経緯を調査したのち、訪問調査による観察、およびインタビューを施行した。検証の中で明確となる課題についてまとめ、最後に課題解決のための提案を行った。

なお、この研究はプログラム施行前に行われたものである。課題解決のための提案が、さらに今後のプログラムの改善に反映されることを期待するものである。

## 論文の構成

### 第1章 序章

|            |   |
|------------|---|
| 第1節 研究の背景  | 3 |
| 第2節 研究の目的  | 4 |
| 第3節 研究の方法  | 4 |
| 第4節 本論文の構成 | 4 |

### 第2章 脳卒中発症者が直面する社会的制度的問題

|                             |    |
|-----------------------------|----|
| 第1節 脳卒中発症動向と医療支援            | 6  |
| 第2節 脳卒中退院後の生活支援と社会参加        | 13 |
| 第3節 まとめ:脳卒中発症者が直面する社会的制度的問題 | 25 |

### 第3章 上伊那地域の脳卒中発症者を取り巻く状況と問題

|                                    |    |
|------------------------------------|----|
| 第1節 上伊那の社会状況                       | 27 |
| 第2節 上伊那地域脳卒中発症者のニーズと支援課題:質的調査による評価 | 41 |
| 第3節 まとめ:上伊那地域の脳卒中発症者が抱える社会的制度的問題   | 59 |

### 第4章 地域で脳卒中発症者の社会参加を促すプログラム(上伊那地域の試み)

|               |    |
|---------------|----|
| 第1節 計画立案に至る経緯 | 61 |
| 第2節 プログラムの概要  | 62 |
| 第3節 各プログラム内容  | 65 |

### 第5章 プログラムの妥当性の検証

|                          |    |
|--------------------------|----|
| 第1節 地域のニーズおよび問題とプログラムの対比 | 78 |
| 第2節 プログラムの計画プロセス         | 80 |
| 第3節 プログラムの持続性の検証         | 83 |
| 第4節 プログラム実施のための資源        | 84 |
| 第5節 プログラムの妥当性:まとめ        | 88 |

### 第6章 プログラムに残された課題の考察と展望

|                  |    |
|------------------|----|
| 第1節 プログラムに残された課題 | 90 |
| 第2節 参照事例との比較     | 90 |
| 第3節 問題解決への提案     | 99 |

|            |     |
|------------|-----|
| 第7章 まとめと結論 | 102 |
|------------|-----|

## 論文の概要

第1章では、本研究に至った背景と研究の目的およびその方法と、本論文の構成を説明した。

第2章では、我が国の脳卒中発症者が直面する社会的制度的問題に焦点をあて、脳卒中発症者が急性期から回復期、生活期の各時期に、適切なリハビリテーションによる生活再構築が行われていない現状、および40歳から65歳の第2号被保険者への介護保険制度における、その地域支援の限界という問題について説明した。

第3章では、上伊那地域の脳卒中発症者を取り巻く状況の分析を行った。加えてその結果を地域の脳卒中発症者に対するインタビューを通じた質的調査と対比した。

上伊那地域は地理的特徴および気候の特性から、脳卒中発症者にとって移動の困難さの問題が生じやすい。一方で公共交通機関は利用しにくく、実際には、多くの脳卒中発症者は、定期受診を除き、送迎付きの通所サービスのみでの外出となりやすい。冬季にはこの傾向がより顕著となる。

急性期・回復期病床を持つすべての病院で、病床数がここ数年で急激に拡大されており、スタッフの急増が続く。指導者自身の経験年数が少なく、地域全体のリハビリテーション医療の質が高まりにくい構造がある。一方県内医療圏域の中で上伊那圏域は、人口当たりの医療スタッフ数は医師が突出して少ない。このため歴史的には保健師が地域での脳卒中予防と再発防止に中心的役割を担ってきた。地域住民と活動を積み重ねてきた駒ヶ根市で先駆的であり、脳卒中発症者の社会参加の取り組みも充実している反面、他市町村との充実度の差も大きい。

雇用については、全国的に製造業の比率が高い長野県の中でもその割合が高く、障害者雇用においても特徴的に製造業従事者が多い。製造業は広い工場内の移動を伴い身体的な負担が大きい。そのため、事務職等、比較的移動の少ない作業が望まれる事が多いが、求人は少ない。

インタビューでは、回復期病棟ではより自立支援的なリハビリ環境の希望が多く、続く生活期でも当地域のリハビリ資源の充実を望む声が聞かれた。その他、同年代の交流の場が通所事業では乏しい事、就労を含めた社会生活の拡大につなげる相談時の支援側の連携が不十分であることが指摘された。背景には障害者制度サービスを全体的にまとめる相談支援専門員の少なさおよび、介護保険サービススタッフの障害支援制度についての専門性の乏しさがあり、これは全国の傾向と同じである。

第4章では、上伊那地域の脳卒中発症者の社会参加の現状を踏まえ、上伊那医療生活協同組合により計画されたプログラムを取り上げて説明した。プログラムの立案に至る経緯と、計画をした組織の説明したのち、プログラムの目的および組織の地域事業におけるプログラムの位置づけを説明した。

プログラムは大きく二つの部分から構成されている。1つは上伊那地域の脳卒中発症者の社会参加の為に必要な場を作るものである。障害者総合支援法制度サービスの利用も含めた拠点施設での活動、自立支援協議会への参加、当事者の会の促進などが含まれる。2つめは脳卒中発症者の生活体験の語りを、社会資源として生かすものである。体験を伝える対象は病院スタッフ・在宅支援スタッフ・介護保険スタッフ等である。また直接語られる他に、媒体を通し地域住民へそ

の内容を発信することも含まれる。本章では3年間に設定されたこれらのプログラム内容の詳細説明を行った。

第5章では、4章で取り上げたプログラムの妥当性の検証を行った。検証は5つの視点から行われた。つまり地域の脳卒中発症者のニーズにプログラムが対応しているか、およびニーズ把握の根拠となったインタビューの内容や対象者の選択が適切であったか、プログラムが適切なリソースにより作成され、かつ利用される制度資源の情報収集が十分であったか、プログラムの運営の持続性や内容の充実が期待できるか、社会資源が適切に利用されているかの5側面である。

分析の方法は、抽出したニーズとプログラムのマッチング、インタビュー方法の確認と対象者の社会属性の偏りの評価、プログラム準備経緯のまとめ、経営計画の確認およびプログラム開始後に内容変更検討の場があるかどうかの確認、社会資源利用の有無の評価の形をとった。

分析からは上伊那地域における本プログラムが、インタビューより抽出されたニーズに対応している事が明らかになった。その根拠となるインタビュー方法と対象の選択は概ね適切であった。さらに収支計画の想定が行われ、利用者数の想定や工賃計画の検討が行われていた。プログラムの内容について、参加当事者が変更の検討と提案を行える事を含め、プログラムが持続していく可能性につながると考えられた。加えて上伊那地域の地理と気候の特性から移動が困難となりやすい点について、移動の確保が検討されている。資源面では、物的、環境的、経済的な資源が準備され、これまで組織的および人的資源の準備も進められてきた経緯が分かる。以上に基づいて、本プログラムが脳卒中発症者の社会参加促進へ大きくつながる可能性が確かめられた。

第6章では、5章で検証されたプログラムに残された課題の整理を行うとともに、課題解決のための考察と展望を説明した。明確にされた課題は、つまり就労への取り組み、プログラムの当事者性の強化、地域リソースとの連携、制度対応への地域内合意形成、地域住民との関係作りに大別される。

まず就労への取り組みでは退院後の心身機能変動期、および利用開始時50代の就労支援がプログラムでは十分ではないという課題がある。これに対し利用早期から年齢を考慮した就労支援体制の確立と、今後の就労移行支援事業併設などのプログラムの拡大の必要性の提案を行った。

次にプログラムの当事者性の強化については、プログラム策定時に当事者が充分関わる事ができなかったという課題がある。これに対し、施設開設後も施設利用当事者や地域の当事者組織との意見交換等を通じ、潜在する新たなニーズをたえず掘り起こす場づくりの工夫を提案した。加えて商品開発を通じ、プログラムを変更させながら当事者が地域の重要な存在となる可能性を確認した。

その他として、地域リソースとの連携がプログラムでは不十分という課題がある。当事者の語りを通じ、医療介護福祉スタッフが事例共有を行う提案と、特に今後重要性がさらに高まる、在宅医療、介護及び福祉に携わるサービススタッフのリソースとしての積極的活用を提案した。

就労支援事業では2015年度から就労移行支援事業所におけるB型アセスメントが、上伊那地域では困難であるという課題に対し、自立支援協議会での協議を中心とした問題の共有化と地域内合意形成による、行政への提言提案を行った。

最後に地域住民との関係作りでは、先駆的な駒ヶ根市と拠点施設のある伊那市で健康づくりの住民意識に歴史的な違いがあるという課題がある。これに対しては、プログラムを通し、地域住民が当事者の語りを見聞きする機会が増えていく中での意識作りが期待される。こうした活動にはある程度の期間が必要であることを確認した。

第7章では、全体をまとめ結論とした。

本研究は高齢者の脳卒中発症者の急増という我が国の社会的現実の中、寝たきり・再発予防を目的とした医療的個別支援を最重要とする脳卒中支援の現状がある一方、支援が不十分となる30～50歳代脳卒中発症者に必要な、地域支援に注目していることが特徴的である。

この研究はプログラムが開始される前の妥当性の検証である。今回の研究が今後のプログラム内容に反映されることが希望である。ならびに継続的に、プログラムの妥当性の検討およびプログラム内容の検討が行われ、プログラムそのものが変革されながら、脳卒中発症者の社会参加を促し、ひいてはより広い地域課題への取り組みとなることを期待したい。